

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 12 日現在

機関番号：32641

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2010～2011

課題番号：22652028

研究課題名（和文）イギリス小説を原作とした映画の体系的理論的研究—イギリス映画研究の総合化へむけて

研究課題名（英文）Systematic and Theoretical Studies of Films based on British Novels: towards a Comprehensive Approach to British Film Studies

研究代表者 新井 潤美 (ARAI MEGUMI)

中央大学・法学部・教授

研究者番号：70222726

研究成果の概要（和文）：

① イギリス映画の体系化という面では、ジャンル論的アプローチ、主題論的アプローチ、時代論的アプローチ、監督論的アプローチなどをこころみながら、複数の作品どうしを相互に関連づけることによって、イギリス映画を全体として研究するための枠組みづくりに取り組むことができた。

② イギリス映画の理論化という面では、文学的批評理論がどの程度有効なのかを検討した。アダプテーションなど映画批評に特徴的な問題についても、文学研究の立場からどのような理論的貢献が可能なのかを議論した。

研究成果の概要（英文）：

For systematic studies, by attempting several different approaches including those concerning genre, theme, period, and direction, we were able to interrelate the various films we examined and to build up a framework for the comprehensive research of British films.

For theoretical studies, we examined the efficacy of literary theory as adapted to film criticism, and discussed the possibility of theoretical contribution to issues unique to film criticism such as adaptation, by using methods of literary criticism.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,800,000	0	1,800,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,500,000	210,000	2,710,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米英語圏文学

キーワード：英文学、イギリス映画

1. 研究開始当初の背景

日本における映画研究が理論的裏付けをとれないながら成熟してきたのは、蓮見重彦が精力的にその分野の著作を出しはじめた1980年後半ごろのことだろう。それ以後、映画研究は確実に成熟するとともに、その成熟を示す専門書と一般書に恵まれてきた。理論的な成果は加藤幹郎の数々の著作（映画作品をジャンルに分類したうえで各ジャンルの特徴を定義するジャンル論、映像をフォルマリストイックに分析する映像論、映画メディアの多様性を論じた映画メディア論、比較映画受容論など多彩な業績の数々）が典型となっている一方で、各国、各地域の映画研究については、四方田犬彦『日本映画史100年』（2000）『アジア映画の大衆的想像力』（2003）、藤井省三『中国映画』（2002）、中条省平『フランス映画史の誘惑』（2003）、北野圭介『ハリウッド100年史講義一夢の工場から夢の王国へ』（2001）などの優れた研究書が出版されてきた。

しかし例外はイギリス映画研究だろう。ドイツ映画研究も多少淋しい気がしないでもないが、ワイマール期の映画を中心として優れた研究がないわけではない。それにたいして、イギリス映画についての体系的・理論的な研究はほとんど存在しないと言ってもいい（イギリス映画研究の貧困さは、日本映画学会におけるイギリス映画研究者の少なさによっても窺われる）。

このような日本におけるイギリス映画研究の貧困は、しかしイギリスにおけるイギリス映画研究の動向と質をかならずしも反映したものではない。なぜならば、イギリスにおいては、とくに1990年代以降以来、さまざまな立場からの体系的なイギリス映画研究が発表されてきているからである。そのような研究の成果を積極的に参照することによって日本におけるイギリス映画研究のレベルを、国際的なレベルに近づけていきたいというのがわれわれの動機であった

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本におけるイギリス映画の研究が総合的な枠組みを欠いたところで、いわば単発的かつ非理論的に行われる傾向にある現状を踏まえ、イギリス映画を体系的かつ理論的に記述するためのいくつかのアプローチをこころみたく、最終的にイギリス映画研究のための総合的枠組み、およびその研究のための人的ネットワークを構

築しようとするものであった。その意味では、本研究は、より総合的なイギリス映画研究のための予備的作業という位置づけになる。

その際、問題になるのはイギリス映画の定義であるが、映画というのが原作者、脚本家、監督、俳優、資本、制作場所などの面で優れて国際的な芸術形態であることに鑑み、可能なかぎり解釈の余地の少ない、「イギリス小説を原作とした映画」という定義を、基本的な線として採用することにした。したがって、イギリス映画の特徴をなすドキュメンタリ映画が排除される一方で（とはいえ、結果的に必要に応じて触れることになったが）、イギリス以外の資本、地域、スタッフで制作された作品をもあえて研究対象としてふくめることにした。

3. 研究の方法

(1) 体系化

イギリス小説を原作とする映画という範囲に絞っても、あつかうべき映画作品は優に1000をこえる数になるだろう。それらの作品群を研究可能な単位に分類する作業が「体系化」である。時代論的アプローチ、ジャンル論的アプローチ、主題論的アプローチなど、さまざまな側面からの体系化が可能であるし、実際、イギリスにおいては、イギリス映画の通史ならびに各時代の映画史、コメディ映画やゴシック映画やヘリテージ映画といったジャンル論的映画研究など、さまざまな体系化のこころみが多数出版されている。本研究は、そのような研究を踏まえながら、多様なアプローチをこころみることになるだろう。

(2) 理論化

「理論化」は、映画研究が批評性を獲得しようとする場合に必要要素であり、文学作品の読解にかんして蓄積されてきたさまざまな文学的批評理論が、映画というテクストを読解する際にどの程度まで適用可能であるのか、適用不可能であるのかを検証するための作業となる。ナショナル・アイデンティティを軸としたイングリッシュネス研究、性別を軸としたジェンダー批評、階級を軸にしたマルクス主義批評といった政治的批評のみならず、構造主義的記号論的批評からディコンストラクションにいたる形式主義的批評が、文学批評だけではなく映画批評にどれほど有用かを具体的な細部にそって検証することになるだろう。

4. 研究成果

本研究の1年目には、5月に、英文学会関

東支部でのシンポ日本英文学会関東支部例会シンポジウム「英文学者は映画を語るか——英文学研究と映画というメディア」に参加し、新井、草光、佐藤が口頭発表を行った。新井は、文学作品の映画化が原作にどれだけ「忠実」であるかという fidelity へのこだわりが、映画研究においてなぜ批判の対象となっているかを、Jane Austen の *Pride and Prejudice* と *Emma* とそれを原作とした映画の比較をとおして考察した。佐藤は、Alan Sillitoe の小説 *The Loneliness of the Long Distance Runner* と、それを原作とした Tony Richardson の長編映画（脚本は Sillitoe）を比較し、文学と映画の表象形式の差異についてのケーススタディを提供した。草光は、フランス史の Nathalie Zemon Davis に着目しつつ、歴史研究と映画制作との相互作用から生まれる新たな可能性について論じた。

7月には、映画における歴史を主題にして、*Winstanley* および *The French Lieutenant's Woman* にかんする研究会を開催した。11月の研究会では、丹治が *Dracula* 映画を対象にしてジャンル系譜論をこころみた。12月の研究会ではポスト・ヘリテージ映画研究会と合同で、*Chariots of Fire*, *The Titanic*, *Holiday* を対象にしてポスト・ヘリテージ映画を、そして3月の研究会では *Howards End* を対象としてヘリテージ映画を、それぞれジャンル論的に検討した。

本研究の2年目には、7月に、*Saturday Night and Sunday Morning*, *Morgan*, *The French Lieutenant's Woman* を中心に Karel Reisz 監督作品について、その特徴および歴史的展開を追究した。10月には、中央大学で人文研公開研究会「イギリス映画とナショナル・アイデンティティ」という公開シンポジウムを開催し、新井が司会、草光が *Brief Encounter*、丹治が *Sense and Sensibility* など Jane Austen を原作としたヘリテージ映画、佐藤が *The French Lieutenant's Woman* を対象として、それぞれのイギリス映画のなかでイギリスのナショナル・アイデンティティがどのように表現されているかを議論した。3月の研究会では、佐藤の著書『ブリティッシュ・ニュー・ウェーブの映像学』（2012年に公刊予定）についての合評会を開催し、ニュー・ウェーブ映画がイギリス映画史のなかで果たした歴史的役割について議論した。

以上の成果をまとめると、以下のとおり、イギリス映画の体系化と理論化という両面で、2年間の研究期間のなかで可能なかぎりのさまざまなアプローチをこころみることができたと言えるだろう。

- ① イギリス映画の体系化という面では、ジャ

ンル論的アプローチ（吸血鬼映画、ヘリテージ映画）、主題論的アプローチ（歴史、階級、ナショナル・アイデンティティ）、時代論的アプローチ（1960年代のニュー・ウェーブ映画、1980年代、90年代のヘリテージ映画、1990年代以降のポスト・ヘリテージ映画）、監督論的アプローチ（Reisz）などをこころみながら、複数の作品どうしを相互に関連づけることによって、イギリス映画を全体として研究するための枠組みづくりに取り組むことができた。

- ② イギリス映画の理論化という面では、映画作品の内容的側面にかんして、歴史主義的批評、イングリッシュネス研究、階級論的研究といった文学研究における政治的批評の成果を映画作品に適用することの可能性を具体的に検証するとともに、映画作品の形式的な側面についても、*The French Lieutenant's Woman* におけるメタフィクション的構造の分析、ヘリテージ映画における風景の映像分析などにおいて、文学的批評理論がどの程度有効なのかを検討した。アダプテーションなど映画批評に特徴的な問題についても、文学研究の立場からどのような理論的貢献が可能なのかを議論した。

2年間という時間的制約のなかでは、イギリス映画の総合化にむけた作業は相当に進んだと考えるが、体系化の面はともかく理論化の面では、正直、まだまだなかばにも達していないという思いもある。今後は、このプロジェクトをとおして拡大することができた研究者の人的ネットワークを活用し、かつそれと同時に研究の対象を「ヘリテージ映画」に絞って、理論的研究のレベルを深めていきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計13件）

① 新井潤美

“Class and Leisure: The English Seaside Holiday”, *Genealogies of Curiosity and Material Desire: How Has Consumer Taste Been Constructed?*, 査読無、2012, pp. 43-48

② 佐藤元状

『フランス軍中尉の女』と時間制のモンタージュ、『教養論叢』（慶應義塾大学）133巻、査読無、2012, pp. 49-70

- ③ 佐藤元状
「真面目な事柄についてのコメディ—『モーガン』と表象の政治学」、『日吉紀要英語英米文学』、査読無、60巻、2012、pp. 55-81
- ④ 新井潤美
「英国階級社会と『英国王のスピーチ』」、『キネマ旬報』(キネマ旬報社)、査読無、2011、pp. 72-73
- ⑤ 丹治愛
「道徳と感性の改革—ヴィクトリア朝における動物愛護文化と英文学」、『ヴィクトリア朝の文芸と社会改良』近藤存志・向井秀忠編(音羽書房鶴見書店)、査読無、2011、pp. 63-84
- ⑥ 佐藤元状
「慶応義塾大学「アカデミックスキルズ」における映像教育」、『オーストラリア学会主催オーストラリア公開講座講義録』、査読無、2011、pp. 44-51
- ⑦ 佐藤元状
「熱帯のフィルム・ノワール—リードの『文化果つるところ』における視線の政治学」、『コンラッド研究』(日本コンラッド協会)、査読無、2011、第2号、pp. 12-25
- ⑧ 佐藤元状
「イギリス映画とは何か?—ナショナル・シネマの完成まで」、『愛と戦いのイギリス文化史 1951-2010年』武藤浩史ほか編(慶應義塾大学出版会)、査読無、2011、pp. 237-252
- ⑨ 新井潤美
「イギリスにおける「教養」の否定」、『比較文学研究』(東大比較文学会)、査読無、第95号、2010、pp. 79-89
- ⑩ 新井潤美
「階級—理想と現実」、『ギヤスケルで読むヴィクトリア朝前半の社会と文化—生誕二百年記念』松岡光治編(溪水社)、査読無、2010、pp. 65-82
- ⑪ 草光俊雄
「ルパート・ブルックとリベラル・イングランド」、『第82回全国大会 Proceedings』(日本英文学会)、査読無、2010、pp. 180-183
- ⑫ 佐藤元状

「アンダーソンの『if もしも...』における抵抗とコラージュの美学—叙事映画と帝国の表象」、『映画とネイション』杉野健太郎編(ミネルヴァ書房)、査読無、2010、pp. 93-117

- ⑬ 佐藤元状
「リチャードソンの『長距離走者の孤独』における風景のリアリズム」、『教養論叢』(慶應義塾大学)第132号、査読無、2010、pp. 27-46

[学会発表] (計20件)

- ① 新井潤美
“Class and Leisure: The English Seaside Holiday”, History of Consumer Culture 国際会議、2012年3月26日、学習院大学
- ② 草光俊雄
“Consuming Plants: Botany and Consumer Society”, History of Consumer Culture 国際会議キーンノート・レクチャー、2012年3月26日、学習院大学
- ③ 新井潤美
「ジェイン・オースティンと階級社会」、千葉大学英文学会第34回大会、2011年12月3日、千葉大学
- ④ 新井潤美
「「学校もの」とハリー・ポッター」、日本イギリス児童文学学会東日本支部秋の例会講演、2011年10月29日、川村学園女子大学
- ⑤ 草光俊雄
『Brief Encounter (逢びき)』に見るイギリス社会」、中央大学人文研シンポジウム「イギリス映画とナショナル・アイデンティティ」、2011年10月18日、中央大学
- ⑥ 丹治愛
「オースティンの映画におけるナショナル・アイデンティティ」、中央大学人文研シンポジウム「イギリス映画とナショナル・アイデンティティ」、2011年10月18日、中央大学
- ⑦ 佐藤元状
『フランス軍中尉の女』と時間制のモンタージュ」、中央大学人文研シンポジウム「イギリス映画とナショナル・アイデンティティ」、2011年10月18日、中央大学

- ⑧ 佐藤元状
「慶應義塾大学「アカデミックスキルズ」における映像教育」、オーストラリア学会主催シンポジウム、2011年7月2日、慶應義塾大学
- ⑨ 丹治愛
「ジェイン・オースティンの風景とイングリッシュネス ピクチャレスクからイングリッシュへ」、ジェイン・オースティン協会大会シンポジウム、2011年6月25日、学習院大学
- ⑩ 新井潤美
「サヴォイ・オペラと「イギリス的」演劇」、日本英文学会第83回全国大会シンポジウム「近代イギリス演劇におけるスペクタクルと音楽」、2011年5月21日、北九州市立大学
- ⑪ 佐藤元状
「慶應義塾大学での映画教育の試み」、日本映画学会第6回全国大会シンポジウム、2010年12月4日、大阪大学（豊中）
- ⑫ 新井潤美
「Tilneys and Trapdoors: ジェイン・オースティンと『観光』」、ジェイン・オースティン研究会（関東）第5回例会、2010年9月19日、青山学院大学
- ⑬ 丹治愛
「モダニズムにおけるジャンル横断的詩学——V・ウルフ『波』における小説と詩」、日本アメリカ文学会東京支部6月例会、2010年6月26日、慶應義塾大学（三田）
- ⑭ 新井潤美
「イギリスにおける「教養」の追求」、日本比較文学会第72回全国大会シンポジウム、2010年6月20日、東京工業大学
- ⑮ 草光俊雄
「ルパート・ブルックとリベラル・イングランド」、日本英文学会第82回大会特別シンポジウム、2010年5月30日、神戸大学
- ⑯ 佐藤元状
「ブリテイッシュ・ニュー・ウェーブ再考」、日本英文学会第82回全国大会シンポジウム、2010年5月29日、神戸大学
- ⑰ 佐藤元状

“Teaching Film Criticism and Film Production in Yokohama”, Conference on Film Education, 2010年5月19日、香港嶺南大学

- ⑱ 新井潤美
「ジェイン・オースティンの作品と映像」、日本英文学会関東支部例会シンポジウム、2010年5月1日、東京大学（駒場）
- ⑲ 草光俊雄
「映画をどう読むか——歴史学研究と映画」、日本英文学会関東支部例会シンポジウム、2010年5月1日、東京大学（駒場）
- ⑳ 佐藤元状
「『長距離走者の孤独』の<孤独>の表象」、日本英文学会関東支部例会シンポジウム、2010年5月1日、東京大学（駒場）

〔図書〕（計2件）

- ① 新井潤美
『執事とメイドの裏表—イギリス文化における使用人のイメージ』、白水社、2011、250 pp.
- ② 新井潤美
『ジェイン・オースティンとイギリス文化』、NHK出版、2010、191 pp.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

新井 潤美 (ARAI MEGUMI)
中央大学・法学部・教授
研究者番号：70222726

(2) 研究分担者

草光 俊雄 (KUSAMITSU TOSHIO)
放送大学・教養学部・教授
研究者番号：90225136

丹治 愛 (TANJI AI)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：90133686

佐藤 元状 (SATO MOTONORI)
慶應義塾大学・法学部・准教授
研究者番号：50433735

(3) 連携研究者

()

研究者番号：